

# 行雲流水

No. 7 9 令和3年7月26日発行

「<sup>こころ</sup>心が生徒の<sup>そば</sup>側にある」ということ

校長 寒河江 正人

これは、**4月1日**に本校教職員の皆さんにお願いしたことの抜粋です。

**1学期の授業日は、あと4日。**生徒の「**つぶやき・能力特性・立場**」に寄り添えましたか。

## Ⅱ. 「教師の心が、生徒の側にある。これが肝心。」（個別最適化した指導・支援）

- 1 どんなに優れた授業実践のつもりでも、**生徒のつぶやき**を受けとめられなければ、そんな授業は、一人よがりの的はずれなものに過ぎない。
- 2 どんなに優れた生徒指導のつもりでも、**一人ひとりの違い**こそが尊いことを理解していなければ、そんな指導は、生徒の心には決して響かないし、届かない。
- 3 どんなに優れた部活動指導のつもりでも、**生徒の立場**に立って、思いを巡らせなければ、そんな指導は、教師の自己満足で、生徒にとっては無意味な苦痛に過ぎない。

かく言う私も含めて、「ひと」は「だれか」に「**自分の思いを聴いて欲しい**」ものです。ところが、「**落ち着いて、相手の話を聴く**」ということは、案外難しいものです。

文豪アーネスト・ヘミングウェイは、こう語っています。

「私は、話を聴くのが好きである。

注意深く聴くことで、多くのことを学ぶことができる。

だが、人の話を聴こうとしない者は、案外と多いものだ。」

歴史上、多くの先人たちが「**聴くことの重要性**」を説いています。

たとえば、「ユダヤのことわざ」には、こういうものがあるそうです。

「人には、口が1つなのに、耳が2つあるのは、なぜだろうか。

それは、自分が話す2倍、相手の話を聴かなければならないからだ。」

カウンセリングで有名な臨床心理学者カール・ロジャースは、こう語っています。

「人は、誰かに話をする事で癒されるのです。

つまり、ていねいに聴かせていただくことで、相手の心が癒されるのです。

ただし、ただ漫然と聞くのではなく、傾聴するという姿勢が大切なのです。」

きっと、「傾聴」とは、相手の「心のものさし」がどんなものなのかを推し量って、相手の「心のものさし」で、「こころ」や「おもい」を理解しようとする事なのですね。